

# 交通行動データに基づく地方都市夜間飲食店街に関する経年変化分析\*

## Time Series Change of Night Activity Site in Local City with Travel behaviour Database\*

秋山孝正\*\*・奥嶋政嗣\*\*\*・名知幹弘\*\*\*\*

By Takamasa AKIYAMA\*\*・Masashi OKUSHIMA\*\*\*・Mikihiro Nachi

### 1. はじめに

地方都市の夜間飲食店街は、モータリゼーションと都市の郊外化の影響から、長期的に低迷が継続しており、中心市街地活性化が、都市再生の大きな課題となっている。本研究では、まちづくり政策の基本として、中心市街地活性化が目指されている「岐阜市柳ヶ瀬地区」を取り上げ、夜間飲食店街の交通行動に関する経年的な分析を行う。特に高度経済成長期および安定成長期における代表的都心繁華街として「夜間飲食店街」に関する経年的な変化を検討する。この際、経年的に蓄積されたPT調査結果（4断面）を利用して、具体的な市民の夜間都市活動に関する分析を進める。特にモータリゼーションの進展と都市の郊外化、夜間活動の増加（24時間化）に着目して岐阜市柳ヶ瀬地区における問題点を整理する。

### 2. 岐阜市柳ヶ瀬地区の概要

本研究では、中心市街地活性化が基本的な問題となっている岐阜市の状況を踏まえて「柳ヶ瀬地区」の交通行動分析を実行する。まず当該地区に関して、都市計画的視点から、歴史的背景と地区の現状について考察する。

#### (1) 柳ヶ瀬地区の歴史的経過

岐阜市柳ヶ瀬地区は、中心市街地として大規模な商業地域が形成されている。しかしながら、近年においては典型的な地方都市の中心市街地衰退の傾向が見られる。このため、岐阜市のまちづくり政策においても重要な課題となっている<sup>1)</sup>。柳ヶ瀬地区は歴史的・文化的な重要な地域であり、岐阜市の観光案内用ナビゲーションシステムにも詳しく掲載されている<sup>2)</sup>。同案内によれば、『明治21年に、岐阜駅が元町から現在の位置へ移転し、また金津遊郭が開設された。また明治22年に、岐阜市

政の施行とともに、町名としての「柳ヶ瀬」が誕生している。明治43年には、映画の前身である常設活動写真館の電気館が誕生し、映画産業が隆盛する。昭和5年、柳ヶ瀬通りのアスファルト舗装が完成し、丸物百貨店（近鉄百貨店の前身）が開店する。さらに昭和20年には、第二次世界大戦の空襲により、焼け野原となる。昭和22年、柳ヶ瀬まつりが挙行される。昭和28年には、信長まつりがはじめて挙行されている。また昭和35年に「柳ヶ瀬商店街」のアーケードが完成する。』

当時より岐阜市柳ヶ瀬地区は、全国的に地方都市繁華街として著名であり、美川憲一の「柳ヶ瀬ブルース」が昭和41年（1966年）4月1日に発売されている。また翌年（1967年）には、岐阜を舞台とした映画「柳ヶ瀬ブルース」（東映）が公開されている。また岐阜市域最大の自然観光資源である長良川に関連して、五木ひろしの「長良川艶歌」が昭和59年（1984年）に発売され、同年のレコード大賞を受賞している。国民経済的には「柳ヶ瀬ブルース」の時代は高度成長期、「長良川艶歌」の時代は安定成長期に分類することができる。

#### (2) 柳ヶ瀬地区の現状

岐阜市柳ヶ瀬地区は歴史的な背景を踏まえて、現在も中心市街地として、大規模な商業的集積を有している。具体的な岐阜駅～柳ヶ瀬付近の概要図を図-1に示す。



図-1 岐阜駅～柳ヶ瀬付近の概要<sup>3)</sup>

\*キーワード：夜間自由活動，交通行動，中心市街地活性化，飲食店街，まちづくり

\*\*正会員，工博，岐阜大学工学部社会基盤工学科（〒501-1193 岐阜市柳戸1-1，TEL:058-293-2443，FAX:058-230-1528，E-mail: takamasa@gifu-u.ac.jp）

\*\*\*正会員，博士(工)，岐阜大学工学部社会基盤工学科

\*\*\*\*正会員，(株)中央コンサルタンツ

岐阜市中心市街地は、「柳ヶ瀬地区」と「JR 岐阜駅前周辺地区」とで構成される。このうち、柳ヶ瀬地区はJR 岐阜駅から約 1km の高島屋百貨店を中心して、周辺地域に柳ヶ瀬商店街・飲食店街・風俗店街（西柳ヶ瀬）が形成されている。鉄道駅～柳ヶ瀬地区が比較的離れており都市構造面の問題も指摘できる<sup>4)6)</sup>。しかしながら、JR 岐阜駅～玉宮通り～文化センター（660m）～金公園（800m）～劇場通り～柳ヶ瀬通り～美殿町は、グルメ&ショッピングコースとして紹介されている<sup>2)</sup>。

しかしながら、柳ヶ瀬地区においては、近鉄百貨店閉店（平成 11 年 9 月）、長崎屋岐阜店閉店（平成 14 年 2 月）、商業店舗 SENSOR 閉店（平成 16 年 8 月）など商業施設の撤退で全般的な衰退の傾向にある。

### 3. 柳ヶ瀬地区の夜間自由活動の分析

本研究の対象である「柳ヶ瀬」地区を中心市街地にもつ岐阜市全域に関する夜間の自由活動者数の時系列変化を集計したものが図-2である。本図より、岐阜市全体では、昭和46年以降、夜間（18時以降）の自由活動数は経年的に増加していることがわかる。このうち、近年の飲食・娯楽施設での自由活動数は経年的に大きな変化がなく、平成3年と平成13年では同程度である。これに対して近年、夜間の小売店舗・その他施設での活動は増加傾向にあり、市域全体で全般的に夜間活動の増加傾向が見られる。このような夜間活動の全般的増加は、①モータリゼーションによる郊外化、②夜間活動の増加（コンビニなど24時間化）、③大規模小売店舗の立地などに起因するとしげ活動変化に起因するものと考えられる。

これは岐阜市の都市構造からも考察ができる。岐阜市のまちづくりに関する分析では、市域を「中心部」「周辺部」「郊外部」に分割して議論する機会が多い<sup>7)</sup>。表-1 に地域別人口の推移を示している。このとき「中心部」が上記の「中心市街地」に対応している。本表よりわかるように、昭和 46 年～昭和 56 年において岐阜市域人口は増加しているが、中心部人口は減少傾向にある。すなわち時点で、人口の郊外化が始まっていると考えられる。このような、モータリゼーションと連動した郊外化は、広域的な夜間活動の増加も助長したものと考えられる。すなわち、周辺部・郊外部で夜間の自由活動が増加する傾向は今後も継続するのを見込まれる。

つぎに、中心市街地に含まれる「柳ヶ瀬地区」に関して同様の集計を行った（図-3）。ここで、中心市街地の面積：6.6km<sup>2</sup>、柳ヶ瀬地区の面積：1.3km<sup>2</sup>である。上記の岐阜市域全体の傾向に反して、柳ヶ瀬地区では、夜間の自由活動数は経年的に減少している。特に柳ヶ瀬地区では、いずれの目的施設での活動も減少傾向である。このうち、飲食・娯楽施設での自由活動数は、平成 13

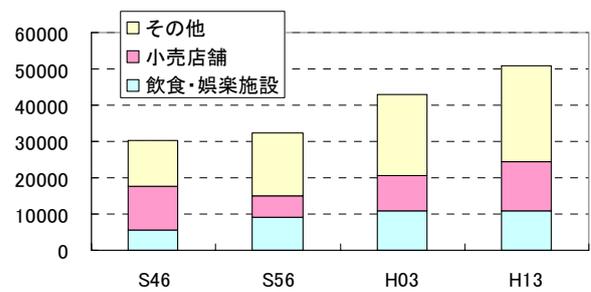


図-2 夜間自由活動者数の時系列変化(岐阜市全体)

表-1 地域別人口の推移

年次	中心部人口	周辺部人口	郊外部人口	岐阜市人口
S46	137,394	155,997	97,850	391,241
S56	107,582	162,005	140,812	410,399
H03	90,395	162,056	158,168	410,619
H13	74,531	162,653	166,451	403,635

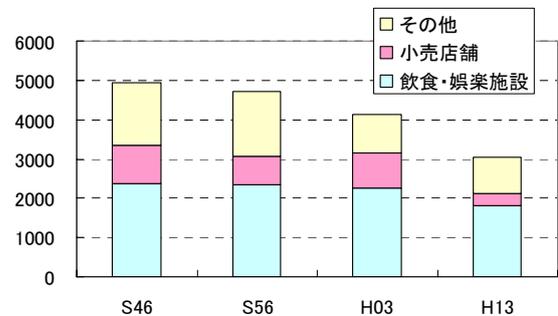


図-3 夜間自由活動者数の時系列変化(柳ヶ瀬地区)

年では、平成 3 年に比して、20%減少している（＝1823/2251）。この柳ヶ瀬地区の夜間活動者の減少を世代別に検討する。夜間活動者の減少は若年者（本研究では、30 歳未満と定義）が最も顕著であり、継続的に減少して、昭和 46 年と比較して 70%（＝△2019/2912）減少している。このうち 72%（＝1463/2019）は、中心地区居住者の活動数が減少していることがわかる。また一方で、中年者の活動者数は大きな変化はない。すなわち、平成 13 年には、昭和 56 年と比較して、13%（＝△300/2241）減少しているが、昭和 46 年に比して若干増加している。すなわち「通常の勤務者」（サラリーマン）に相当する中年者の柳ヶ瀬地区の活動は、ほぼ同様な状況にあることがわかる。

さらに、夜間活動者の減少を職業別に見ると、就学者・就業者の減少が顕著である。すなわち柳ヶ瀬地区での夜間活動は「多数の若年層の就学者（いわゆる学生）・就業者が行ってきた夜間活動の活気」の喪失が本質的な問題であるといえる。現行でも、あきらかに日常的に柳ヶ瀬地区で宴会に集う若者は少ないが、郊外の大規模集客施設に集う若者・家族を見ることは多い。

つぎに活動者の滞在時間から行動様式を検討する。

ここで、柳ヶ瀬地区の滞在時間2時間以上の者を「長時間滞在者」とする。長時間滞在者数は昭和56年・平成3年は同水準であり、平成13年には平成3年より26%減少(=△781/1054)していることがわかる。すなわち「柳ヶ瀬地区での消費時間が減少している」ことがわかる。

さらに、具体的な活動形態を検討するため、柳ヶ瀬地区の自由活動の滞在者数の時間的変化を、図-4に整理する。表-1に示したように、昭和46年～昭和56年では、市域人口は増加傾向にあった。昭和56年は長時間滞在者も多数存在し、ピーク時間の滞在者が四断面では最大である。この時期には、平日午後8時頃に2,000人以上の滞在者が柳ヶ瀬地区で活動を行っていた。一方で平成13年には、ピーク時間帯においても半数程度(1,000人)の活動者数となっている。また平成3年(1991年)は、柳ヶ瀬地区活動者数は、昭和56年に比して若干少ないものの、バブル期(1986年～1991年頃)の影響から商業販売額等は昭和56年に対して相対的に大きい。

このとき、柳ヶ瀬地区での時間帯別の活動者数に対しては、①ピーク時間帯での活動者数の減少と、②深夜時間帯(22:00以降)の活動者の増加が顕著な特徴として挙げられる。また平成13年には、時間帯別分布は平成3年次と同様であるが、全般的に活動者数が減少している。これら分析から、最近の動向として「柳ヶ瀬地区における平均的な活動者数は、いずれの時間帯においても減少している。また深夜の活動者数は増加しているが、昭和56年と同程度である」といえる。

これらの状況を空間的な活動者分布として示したものが図-5である。具体的には、昭和56年(時刻:19:40)および平成13年(時刻:21:10)についてピーク時刻の活動者の空間的分布を、交通行動データを基本として、GISの表示機能により作成したものである。本図を参照すると、全般的には昭和56年(左図)に比べて平成13年(右図)では大きな活動者数の減少が見られる。

また、夜間飲食店街の多数立地する「西柳ヶ瀬地区」(左半分)における近年の活動者減少が顕著であることがわかる。以上のような考察から、柳ヶ瀬地区においては、自由活動目的(飲食・娯楽を含む)の活動者数が減少し、地域の「にぎわいに」対応する空間的密度は顕著に減少している。一方で、商業地域の規模は顕著に減少しているわけではない。この意味で、柳ヶ瀬地区葉地方都市再生の議論において、典型的な「空き店舗が多く、まちなかを往来する人の少ない閑散とした中心市街地」となっていることを示している。

#### 4. 夜間の特徴的交通行動分析

前章で基本的な中心市街地への来訪者の減少要因に関する分析を行った。ここでは、柳ヶ瀬地区の夜間自由

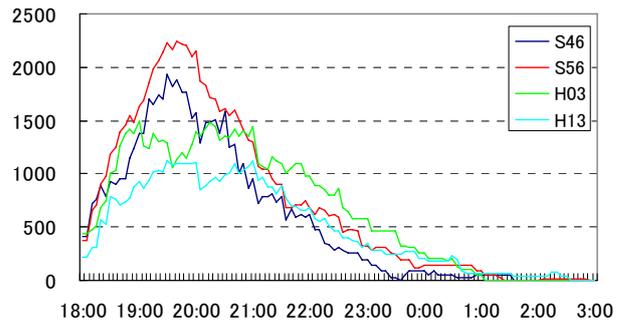


図-4 自由活動滞在者数の時間的変化

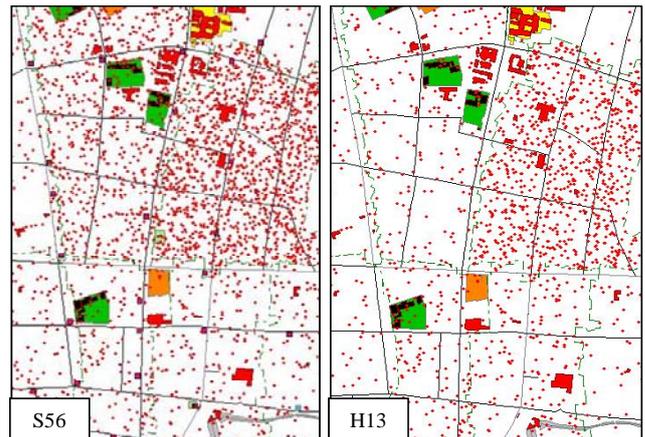


図-5 ピーク時間帯での自由活動者分布

活動者の行動形態を経年的に比較する。まず夜間の飲食活動における、1次会・2次会などの複数活動場所をもつ、いわゆる「ハシゴ」行動者に着目する。飲食・娯楽を中心とする商店街にあっても、多様な形態の店舗との関係から複数目的地を持つ場合がある。図-6は、柳ヶ瀬地区の夜間複数自由活動者数の推移を示している全活動者数が最大であった平成3年において、「複数活動者」は減少に転じ、平成13年には昭和46年の水準より低下している。これは「柳ヶ瀬地区」における店舗の多様性が失われつつある傾向から「複数の店舗のハシゴ」が減少しつつあることを示している。十分な統計資料は欠くが「飲食店の多様性が喪失し、均質な形式が増加した」との分析にも呼応している。

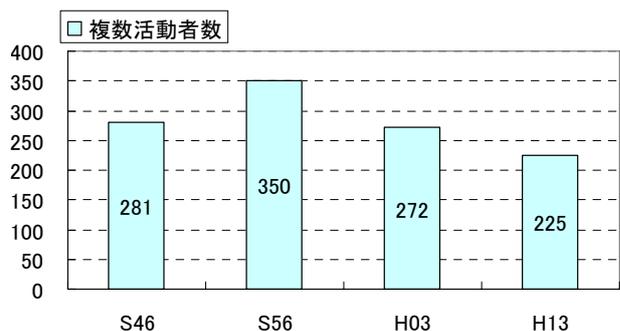


図-6 夜間複数自由活動者数の推移

つぎに柳ヶ瀬地区の夜間活動者の利用交通手段として、タクシーの利用に着目する。柳ヶ瀬地区の夜間活動者のうちタクシー利用者数（発生・集中ベース）の経年変化を図-7に示す。これより、岐阜市中心部に人口集積が多数あった昭和46年には、夜間タクシー利用者は400名程度である。昭和56年に大きく増加し、平成3年・平成13年は減少する。特に平成13年には昭和46年水準より低下している。これは、中心部から郊外部への居住地変化（一次的变化）さらに、生活地域の郊外化（二次的变化）を明示的に表現する交通行動変化である。平成13年のタクシー利用者は、昭和56年の23%（＝191/816）とであり、タクシー需要の低下は顕著である。これは、柳ヶ瀬地区でよく見られる光景として「タクシー駐車待ち行列」との対応が即座に認識できる。

さらに交通環境と柳ヶ瀬地区の動態を検討するため、柳ヶ瀬地区の全夜間活動者の利用交通手段（集中とリップベース）を図-8に推計した。この交通機関分担の傾向は岐阜市全域の傾向と同様である。鉄道・バスの利用の来訪者は減少し、自動車利用の来訪者が増加している。自動車利用者数の増加は、都市全域における増加程度に対して小さいものの、飲食・小売業を主体とする当該地区においても増加傾向にあり、モータリゼーションの影響が大きいことがわかる。さらに、交通機関で顕著である点は「徒歩交通」の急激な減少である。本図によれば、平成13年の柳ヶ瀬地区への徒歩トリップ数は、昭和46年の17%（＝454/2613）となっている。「柳ヶ瀬ブルース」の時代に当該地区を歩く人々の「にぎわい」は、現在では見ることはできないであろう。

## 5. おわりに

本研究では、中心市街地活性化の典型的な対象地域とされる岐阜市柳ヶ瀬地区に関して、高度成長期からの都市活動の変遷に関してPT調査結果を利用して分析を行った。これらの分析の結果、今後の「まちづくり」に関連するいくつかの有益な知見が得られた。

- 1) 都市の郊外化・モータリゼーションは若年層・中心部居住者層の減少を加速し、夜間活動全般の増加に反して、柳ヶ瀬地区ではにぎわいの減少を与えている。
- 2) 夜間の都市活動形態の変化は、生活様式の変化に大きく依存し、深夜化の傾向にある。また「にぎわい」の減少の主要な傾向は徒歩交通（同地区を歩く来訪者の減少）に起因することがわかった。
- 3) 都心部の居住者は中心部の都市的魅力を享受できる方法により増加の可能性はあるものの、夜の柳ヶ瀬地区の再興に関しては、都市構造的な問題も含まれる。今回の分析では、PT調査結果から知られる交通現象に基づく解釈を基本として、夜間の都市計画を検討した。

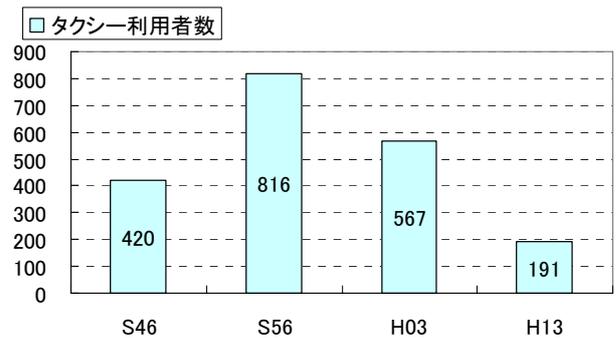


図-7 タクシー利用者数の経年変化

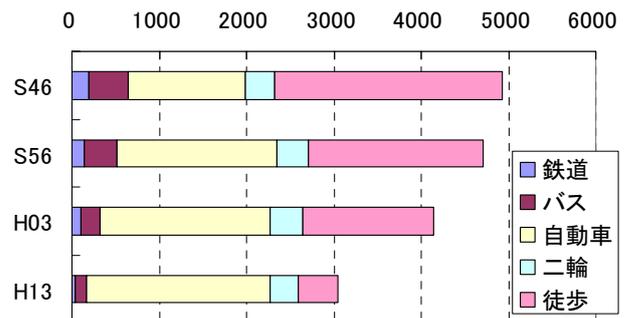


図-8 夜間活動者の利用交通手段

岐阜柳ヶ瀬地区再興のためには、さらに中心市街地商業店舗の魅力向上、市民の活動意識の高揚<sup>8)</sup>などに着目した実証的な検討も必要であると思われる。

最後に本研究の遂行にあたり、資料収集および岐阜市まちづくりの実態把握に関して、岐阜県および岐阜市の関係機関の皆様にも多大な御協力を得た。またパーソントリップ調査利用に関して中京都市圏交通計画協議会の御了解を頂いた。ここに記し感謝の意を表する次第である。

## 参考文献

- 1) <http://www.city.gifu.lg.jp/> (岐阜市ホームページ)。
- 2) <http://gifuizanavi.city.gifu.gifu.jp/> (きふいザナビ) 2006。
- 3) <http://www.mapion.co.jp/> (マピオン)。
- 4) 秋山孝正, 田中尚人, 奥嶋政嗣, 中谷紘也: 関西都市圏における鉄道駅ポテンシャルの算定, 土木計画学研究・講演集, Vol. 33, CD-ROM, No. 140, 2006。
- 5) 北村隆一編著: 鉄道でまちづくり, 学芸出版社, 2004。
- 6) 松澤光雄: 繁華街を歩く 東京編—繁華街の構造分析と特性研究—, 総合ユニコム, 1986。
- 7) 名知幹弘, 奥嶋政嗣, 秋山孝正: 交通行動分析に基づくまちづくり方策に関する検討, 平成18年度土木学会中部支部講演概要集, CD-ROM, No. IV-22, 2007。
- 8) 秋山孝正, 奥嶋政嗣: まちづくりにおける公共性と精神性に関する基礎的な考察, 平成18年度土木学会中部支部講演概要集, CD-ROM, No. IV-27, 2007。